

幼稚園のある一日



九 月

内 田 和 子

一、はじめに

長かった夏休みも終わり、日焼けした元気な顔が、幼稚園いっぱいにあふれている。

一段と成長したこの幼児たちも、一学期間、はじめて幼稚園生活を体験したわけである。幼児自身にとっては、はじめての集団生活ということの中で、楽しい中にも自分を押えてみることを勉強したわけである。幼児には疲れがみえてきていたが、夏休みによって、もう一度家庭的なふんい気を十分味わうことができ、そこで家庭でしかない経験をしたことであろう。

海へ山へいなかへ町へと家族とともにした経験は、幼児にとつて、大きな心の糧たすけとなったであろうと、私の胸の中は、期待でふくらみはじめた。同時に、集団からとりのこされる幼児がないように、友だちを十分認める中で、自分を生かしていく幼児になってほしいと思う。そのために、私自身、ひとりひとりの幼児をよく見つめ、集団の中で満足して交友関係がすすめられるよう、教師と幼児の人間関係を基本にしながら、幼児対幼児の関係を大切にしていきたいと思う。

しかし、実際には、幼児たちは、友だちに会えるのがうれしく

て、ただなんとなくはしゃいでいる者、なつかしそうに友だちと話をしている者、教師の手をとりながら話を聞かせてくれる者、など、さまざまで、入園当初の状態にもどった幼児たちもいる。

そこで、一日も早く生活リズムを整えてあげ、ひとりひとりの幼児に満足を与えながら接する中で、それらの幼児が、うまく集団に適應していくことができるようにしなければならぬと思いい、九月の幼児の姿をつぎのように考えてみた。

◎ 生活環境を整え、集団の中で安定した気持で行動できるようにする。

◎ すすんで物事にあたる態度をつける。

◎ あそびの中で、ルールのあるあそびをださせるようにしむけ、共同の仕事やあそびができるようにする。

つきに、具体的に、ある一日について述べてみたいと思う。な

お、私のクラスは、一年保育五歳児三十五名である。

二、実践例

(1) 月日 九月一六日(水)

(2) 前日の活動

① 幼稚園ごっこ

K子を中心にして、はじめ四名で「おうちごっこ」をしていたが、M子の発案で「幼稚園ごっこ」に移行し、教師も仲間入りしたため人数も増し、幼稚園とうちのグループに分かれてあそぶ。

② レールセット

机・椅子・積木・円筒の補助材料を利用して、六名のグループでハイウェイを作り、立体交差してあそぶ。

③ リレーごっこ

二組に分かれ、円筒三個ずつ一列に並べ、それをとびこし、椅子をまわって、次の者に交代する。

(3) 本日の指導のねらい

・ きっかけをみつめて、友だちとあそぶ。

・ グループの活動の中で、ひとりひとりの幼児の発言を大切に育ててやる。

(4) 実践

長い休みも終わり、幼稚園生活を待ちのぞんでいた幼児と、集団に対して引っ込み思案になった幼児が見られる。その幼児たちを迎えて、教師自身、一学期における先入感にとらわれず、すなおな気持で幼児の登園を待つ。どの幼児も安定感をもって自分の生活にとりくめるよう、ひとりひとりの幼児のもっている要求に直接ふれ、判断してやらねばならない。そのために、「幼児の心

と教師の心のふれあい」を大切にし、それをおして、幼児と幼児の心のふれあい」にのばしてやりたいと思う。

八・一五

・「先生、おはよう」と元氣者のT男ら三名が保育室にとびこんでくる。「おはよう」と教師があいさつを交わしているうちに、おたより帳を教師に手渡し、急いでなわとびのところへ走って行く。そして、なわ電車を作り、「発車、オーライ」と廊下へ走り出して行く。T男らのたのしいようすを眺めながら、きょうも元氣よく活動できるだろうと安心する。

・K子が登園してくる。K子もあいさつをすませると、「先生、きのうのつづきをするわね」といって、きのう残しておいた幼稚園ごっここの場所へいき、おもちゃを整理しながら友だちを待っているようである。一学期は、自分の意志をとおそうとして、よくけんかをしたり、告げ口をしてきたK子が、この夏休みの間に大きく成長したとうれしくなる。T男やK子のようにのびのびと自分の考えで行動できる幼児に対しては、教師としても同じような気持で幼児に接することができるので心から楽しくなる。

・つづいてW男が入ってくる。W男は、いつものように周囲をきょろきょろと見わたしている。そして、上窓のところにトンボ

を見つけた。「先生、トンボがおるわ」と指さす。教師も見ると、大きなトンボが窓枠にとまっている。

そばにいた四、五名の幼児も気がつき騒ぎだす。そして、窓のところにかけより、とびあがってトンボを取ろうとする。このさわぎにトンボの方もびっくりして、飛びたつたので、幼児たちは、キャッキョッキョといって部屋の中を走りまわって、トンボを追いかける。トンボもしばらく逃げまわっていたが、やっと窓の外へ逃げていった。

幼児たちは、がっかりして「とんでいったなあ」と、顔を見合わせている。そこで教師は、「残念だったわね。でも、トンボは広い空の方がずっと楽しくあそべるのよ。そして、トンボはトンボの仲間とあそぶのが一番いいのよ。みんなだってお友だちがいるから楽しくあそべるのでしょう」と話をしてあげると、「うん」といって、運動場へあそびに行く者、また友だちのあそびを見に行く者と分かれていく。

この幼児らは、トンボという突発事件で、調子を狂わしたようであるが、きょうは、時間的に短く（五分ぐらい）早く本来の幼稚園の生活リズムへ切りかえられたので、教師としては、やれやれと安心した。

このような場面は、ときどきあり、トンボに限らず犬などが入

つてくると幼稚園じゅう大騒ぎになることが多くある。

・ T子がだまって部屋に入ってくる。この幼児は、五月に転園してきて、集団生活に慣れにくく、やっと友だちができたと思ったら夏休みに入ったので、二学期がはじまって、また、入園当初の不安定な状態にもどってしまったようである。

だまって教師のところにおたより帳をおきにくる。「Tちゃんおはよう」と声をかけたが、だまって本立てのところへ行行ってしまふ。そして、ひとりて本を見はじめる。バラバラとめくっては、次の本とかえにくるので、きのうみんなに読んであげた『黒うさぎと白うさぎ』の本を手渡してあげると、うれしそうに受取ったが、やはり、バラバラとめくって見ているだけである。

やがて、T子は、本をしまいK子たちの幼稚園ごっこのところへ行きだまって眺めている。

教師が直接ことばをかけたり、手をとって指導すると自分の内にとじこもってしまうタイプなので、しばらくT子のようすを見守ることにした。

今度は、テラスにでて、外であそんでいる友だちを見つめている。やがて、また、幼稚園ごっこのところにもどってきて、友だちのようすを見ている。ここであそびたいのだなど教師は判断して、リーダー格のK子に「Tちゃんも入れてあげて」とたのむ

と、K子は、気持よく受入れてくれて、「Tちゃん早くここにすわりな」と椅子を指さす。T子は、だまってすわる。もう少しようすを見るため少し離れて観察することにした。

T子のように自分の要求をうまく表わせない幼児に対しては、直接教師自身がかたばや動作で指導できにくいので、教師自身が早く幼児の心をつかみたいという気持をおさえて、暖かく見守らねばならない。非常に、根気と愛情が必要なため、教師自身が試験の場に立たされているようで、何もできない自分にもどかしきを感じる。

・ F男とK男は、何か落着かずそわそわとしている。だれかを待つているようである。N男が登園してくる。二名は、急いでN男のところへ走って行って「Nちゃん、いいことがあるので早くおいで」と急いで廊下へ連れていく。「なにや」とN男は、ここにこついでいく。(N男は、だれからもすかれ、創造力が強く、運動能力もある、男らしいリーダー格の幼児である)

二名は、N男に何かこそそこそとカバンの中からとりだし手渡している。F男とK男は、教師に気づき「おい、かくせ」と手でおってしまふ。「あら、先生にも見せてよ、だめなの」と、いうと、F男は、「うん、いいけどさな、Kちゃん」といって、手の下からグニコのおまけのトランジスタラジオと自動車を見せて

くれる。N男は、「これ、ぼくにくれたの」と返事をする。

「そう、よかったわね」と、教師はF男とK男がN男と友だちになりたいため、このようなことをしたいのだなという気持をすなおに受け入れてあげ、この小さなおもちゃが、幼稚園のあそびに影響することもないので、きょうは、家庭のおもちゃをもってきてはいけない約束も例外として認めることにした。

N男は「ありがたい、ぼくも集めているで、あした三つもってきてやるわ」と教師の顔を見ながらF男らにいつている。そして、カバンにしまいながら「Fちゃんは何がほしいのや、人形か」と聞いている。F男は「人形はいや、何でもいいわ」と答えている。そして、「Nちゃん、はようぼくとウルトラマンごっこしてあそぼう」といっしょうけんめいに誘いかけている。N男は、「うん」といって、F男らの机のところへ行き、粘土であそびます。F男は「Nちゃんはじょうずやでウルトラマン作ってな。ぼくは、怪物作るでな。Kちゃんは、わくを作んな」といって、楽しそうに話しながらあそんでいる。そして、三名合作でウルトラマンが怪物をやっつけている模型を作りだす。

あこがれのN男とやっとなあそべたF男とK男のうれしそうな顔を見て、教師まで心暖まる気持になった。このように、いっしょうけんめい友だちを作ろうとしている幼児をみると、い

じらしくなり、何とか力をかしてやりたくなり、早まる気持をしずめるのに、自分自身とたかかねばならない。

また、一方では、まだまだ教師との一対一の接触をのぞんでいる幼児もいるわけで、その幼児には、十分その要求を満たしてあげねばならない。

以上のようにいろいろの状態の幼児がいるが、二学期が始まって二週間では、これ以上のぞむことはむずかしい。今後は、ひとりひとりの幼児の要求を見つけてあげ、いっしょにあそぶことにより、満足感を味わわせ、幼児がのびのびと豊かな経験ができるよう、また、交友関係が深められるように心がけていくことが大切だと思った。

九・〇〇

全員が登園をすませ、ごたごたした幼稚園の生活リズムにおけるウォーミングアップのような時を経て、落着いてあそびだしたようである。

幼稚園(ごっこ)

友だち待ちをしていたK子は、きのうのメンバーが六名そろい、相談をはじめた。K子「きょうもわたし先生にさせてな」

M子「わたしは、おかあさん」とみんなの同意を求める。それからM子を除いたみんなで、積木を利用して、机と椅子を作り、絵本を全部本立てよりもつてきて、一カ所に積んでおく。K子は、オルガンを作り、絵本を楽譜にみたててひきだす。他の四名もダイヤブロックのかがを持ちこみあそびはじめた。M子は、ひとりでママゴトコーナーでごちそうを作りはじめる。Y子とA子が「入れて」といって仲間入りをする。K子が「みなさん片づけましょう」と、声をかける。みんなは「はい」と返事をして、ブロックなどを片づける。

K子「きょうは、先生といっしょに運動会の練習をしましょう」といって、K子を先頭に一列になって行進をはじめた。そろそろみんなはついて歩く。そこでK子に「Kちゃん、この鈴ふって歩いてごらんさい。みんなじょうずに歩けるわよ」と教師がリングベルを渡すと、K子は、「キラキラ星」を口ずさみながら鈴をふって歩く。さつきよりじょうずに行進ができていようである。K子「きょうは、これで幼稚園おしまいです。ごあいさつしましょう」というと、他の幼児は「先生、さようなら」といって、M子のいるおうちへ帰って行く。K子のさつきの動作を見て、ことばつきといい私のとあまりにも似ているので苦笑する。とともに、自分の平常の幼児の接し方について反省させられた。

一方、M子はみんなが帰ってきて大張切りで、今まで作っていたごちそうを机の上にならべ子どもたちにたべさせている。M子「幼稚園で何してきたの。ごはんをたべたら勉強して寝なさい」と子どもたちにいい聞かせている。M子の母親の顔が私の目の前に浮かび、M子に同情してしまう。私自身が親に対して、子どもとはどういうものか、また、どのように発達していくのか、親といっしょに考えていく機会の少なかったことを反省する。

一方、K子は、幼稚園ごっここの道具をひとり整理している。それをじっと見つめているT子を見て、いっしょにあそびたいのだなど判断して、「Tちゃん、先生といっしょに幼稚園ごっこに入れてもらわない」といってT子の手をつなぎ、教師もK子の仲間入りをする。

しばらくすると、母親役のM子に見送られ四名が「先生、おはよう」といって、幼稚園へくる。先生役のK子は張切って「きょうは絵かきしましょう」といって、みんなに絵本を配る。B子「絵本より本当の自由画帳をもってこよう」と発案し、みんな自分のたちの自由画帳とパスを持ってきた。

教師もいっしょになって活動していると、K子「先生おると恥ずかしいわ、あっちへ行つて」という。「えやないの、いっしょにしよう」とS子はいう。考えてみれば、先生役のK子は、本物

の教師がそばにいては、やりにくいにちがいない。

そこで、このグループは、教師がいなくても十分活動ができる
と考え、一方では、教師といっしょにあそびたいというS子の気
持も受容しながら「そしたら、もう少したったら、また、幼稚園
の子どもにしてね。先生Cちゃんのところへちよっといってくる
わ」というと、S子も「うん」といつてくれたのでこのグルー
プから離れる。

一学期期だったら教師がいると喜んであそんだK子だったのに、
自分たちだけでもあそべるように、また、はっきりと自分の思っ
ていることをいえるように成長したことをうれしく思った。

レールセット

レールセットは、ひとりでもあそべるし、友だちとすれば、な
お楽しいという構成遊具なので、入園当初から人気のある遊具の
一つである。

二学期に入っても四、五名の幼児が興味を示している。しか
し、一学期のように長くのぼすことにより満足するというのでは
なく、場面をせばめ、いかに複雑な立体交差をするかということ
に関心を集めている。

K男・S男・F男・O男の四名も登園すると、すぐレールセッ

トのところいき活動をはじめ。

K男「きょうは、四重列車にしよう」とひとり決め、レール
を四本横にならべて、出発点を決める。他の幼児もそれぞれ勝手
にレールを作っても満足するものがないことを今までの経験
で十分知っているのので、だまってK男に協力している。S男「K
ちゃん積木でトンネルしてもいい」と聞くと、K男「うん」と返
事をし、同形のレールを四個ずつ揃えている。O男は、椅子と積
木の板をもってきて、椅子に斜めに板をおき、大きな坂を作り、
そこへレールをひいている。「おい、これも使おうに」とF男が
円筒の小さいのを二個もってくる。O男「それは、山の中をお
るトンネルにしな」F男「この椅子の中をおすのやろう」O男
「そうさ、手伝ってやろうか」といつて、F男とO男は、大きな
山の中へトンネルをおした。

四個ずつレールを分け終わったK男は、出発点のレールへそれ
ぞれをつないでいる。直線で少しつなぎ、カーブでふたてに分か
れ、それぞれすんでいく。S男は「Kちゃん、こっちの線ぼく
のとつなげて」とたのむ。K男「よし、ぼくのおわりとつなげ
るようにしてな」という。S男は、うれしそうにききにつなぎだ
す。このすばらしい構成力を見て、教師自身この幼児たちに、活
動をにぶらせるような助言を与えてはと思ひ、遠くからようすを

見ることにする。

リレーあそび

テラスでは、E子ら六名が円筒をもちだし二組に分かれて、リレーをやっている。どのようにしてあそんでいるのかと思ひ、教師も仲間に入れてもらう。三名ずつ分かれ、それぞれ円筒を三個ずつ一メートルぐらい間隔をあけてたてに並べ、一個ずつとびこし、その先にある椅子をまわってもどってくる。そして、次の走者へタッチしていく約束らしい。

E子「あんたたちこの線にならびな」といって、チョークで線をひく。T子「一列にならぶの。Hちゃん横へではいかんの、ちゃんとならびな。わからんやないの」という。H子もいわれたとおりにおしている。「用意 ドン」とT子の合図で、両組一斉にスタートする。全員とびあがって応援している。T子も走る仲間に入り、いっしょうけんめい走っている。

勝負にこだわらずに何回でも走っている。このあそびに気づいた幼児が集まってきて見ている。M男「何やどっちが勝ったかわからんわ。先生どっちが勝つとるの」と聞く。教師も、M男がいどころに気づいてくれたと思ひながら、「先生もわからないのよ」と返事をする。

幼児たちの勝負についての興味は、はじめは勝負にこだわらず、自分が力いっぱい行動することに満足を覚え、つづいて、一対一で競争して勝つことに、それからグループで競争して勝つことに興味をもっていくようである。

すばやくT子が前にでて「だれから走ったの、手あげな」という。N子とA子が手をあげる。N子は先頭に立ち、A子は、前から二番目にいる。「Nちゃんの組が勝ったんやないの」という。そばにいた者も何もいわず「早ようつづけてしよう」という。

そこで教師は、リレーについて正しいあそび方も理解してほし、勝負についても共通の理解をもってほしいと思ひ、「そうね、では、よく判るように、今度は先生が見てあげるから、もっと広い場所でしましょう」と誘いかけると、「わあい」とみんなは喜んで「どこでするの」とたずねてくる。「そうね、運動場のまん中がいいわね」というと、T子「でも先生、筒はいいけど椅子はもっていけないでしょう。まわるのに困るわ」という。

「そうね、じゃあ、もっといいものをもつてあげるわ」とい、フラフープと円筒をもつて外へでた。

何をするのだろうとおおぜいの幼児が集まってきたので「それでは、もっとおもしろいやり方で、みんなとあそびましょう」と教師がいうと、幼児たちは、とても強い興味を示してきた。そこ

で、教師が中心になり、二組に数をきちんとわけ、フラフープをくぐりぬけて、円筒をまわってもどってくる。そして、次の者にタッチして交代することを説明し、一回だけ走る約束をして、はじめ。

A組は、ひとまわりするとちゃんと待っていたが、B組の方は、もう一度走ろうとするので、みんなに注意されてもどってくる。これでどちらの組が勝ったのかみんなに理解されたようである。「先生、もっとフラフープふやして」とB男の要求で、数を増した。たくさんくぐった方がおもしろいなあ、という声も聞えてくる。

クラスの半数以上の者が参加しても、順番を守って楽しくあそべるようになったので、このような機会を多く作って、能力がわななくて集団からはずれたり、自分からぬけだす幼児がなくなるようにしていきたいと思った。

他に、虫とり、なわとびなどであそんでいる幼児もいるが、ここでは、紙面の都合上省略する。

一〇・一五

それぞれの活動に十分満足したため興味が低下したことによるのか、幼稚園全体のふんい気がなんとなくたがってきた。

O子は、教師のところに来て、「先生、きのうみたいに、みんなでおゆうぎしましょうよ」といってくる。

「そうね、それでは、みんなにもそういつてちょうだい」と返事をして、教師は片づけはじめ。それに気づいた幼児たちもそろそろ片づけはじめ。

元気者のT男らは、もつと自分たちのあそびをつづけたいのであろうか「ちえつ、もう片づけとるわ」と不満顔をする。

ちょっとかわいそうな気持もしたが、あそびをうち切る経験もあってもいいと考え、T男たちの気持をわざと無視した。運動会前になると、たびたびこのような場面につづかり、教師自身も苦しむこともある。

しかし、運動会を機会に大きく幼児たちが成長していくことも事実なのである。だいたい片づいたので、きょうは、はじめて全員小学校の運動場にて、行進の練習をする。

一〇・三〇

せまい保育室を離れ、幼稚園児全員が小学校の運動場へ行く。はじめ、きょうきょうとあたりを見まわしたりする幼児も多く、揃って歩くことがむずかしかったが、慣れるにしたがって、曲に合わせて、だんだんじょうずに歩くようになってきた。この調子

で二、三回運動場を借りて練習すれば、幼児たちも落着いて、やるようになるのではないかと思う。

しかし、調子を合わせる感覚面で個人差がはげしいので、能力の低い幼児をいかに楽しくひきあげるか、これからの教師の努力にかかっている。

一一・〇〇

幼稚園児全員でのリズム活動は、緊張も伴い、幼児たちも疲れ気味のようすなので、部屋に入り、休息もかねて、教師が、全員の幼児に絵本『大男のかぶらかぞえ』を読んで聞かせてあげる。かぶらのしなびていくようすのおもしろさやエンマの知恵のすばらしさに、幼児たちは、いっしょうけんめい聞き入っている。

一一・三〇

降園

三、おわりに

きょうもいろいろな活動が行なわれた。どの活動をとおして考えてみても、幼児たちは友だちといっしょにあそびたいという気

持が強く感じられた。

一学期では教師対自分という感情が強くはたらいっていたのに、このように友だちを求め、あそびを広げ、深めていこうとする態度に対して、教師自身は、なおいっそう、ひとりひとりの幼児をしっかりと見つめ、ある時は直接的に、また、ある時は側面からしっかりと援助してやらねばならないと思った。

一方では、能力のおくれた幼児や、性格的に集団に入れない幼児が、どの集団にも入れずにとりのこされることのないように、教師との心のふれ合いはもちろんのこと、幼児対幼児のふれ合いもしっかりととらえ、正しく指導してやらねばならないと思う。

まだ、幼児の要求が、友だちといっしょに行動したいということへ強く移行していく状態を教師自身、身をもって感じさせられた一日であった。

生活リズムを整えるために、何となく活動にしまりが無い感じが残ったが、この時期として、このような一日があってもいいのではないかと思う。

(四日市市立下野幼稚園)